

## 良寛

良寛は宝暦8年（1758）12月に出雲崎の名主であった山本左門の長男として生まれた。本名を文孝といい、父は後に剃髪して以南と号した憂国の士である。

安永4年（1775）18歳の時、俗事をきらって山本家を弟の由之に譲り、同町の曹洞宗光照寺に入る。22歳のときに備中玉島の円通寺、国仙和尚が巡教のため光照寺に逗留する。その高德を慕い剃髪して良寛と号し、玉島で修行する。

寛政3年（1791）に国仙和尚がなくなり中国、四国、近畿を行脚する。

寛政7年の京都滞在中に勤王活動をしていた父以南が桂川で投身自殺する。良寛は父の追善供養をして38歳の時に帰郷する。

文化元年（1804）の五合庵定住までの9年間、国上・寺泊などの草庵を仮住まいに転々とする。

五合庵は貞享年間（1684～87）国上寺に客僧となった萬元上人が一日に米を五合うけて住んだところから名づけられた草庵である。

良寛は47歳から五合庵に住み、三条や近郷を托鉢する。この頃、加茂に江戸の大儒者である亀田鵬斎が逗留していて良寛と三条八幡宮の祭り幟を書く、また地蔵堂町牧の花の素封家、解良喜惣左衛門と深交されて多くの良寛遺墨を同家に残す。直径43cmの鍋蓋裏に「心月輪」と書かれたのもその一つで、後に刻字され、有名である。

山の中腹までの上り下りが難儀になるものか、また人里が恋しくなったのか文化13年（1816）の59歳のとき山麓にある乙子神社の草庵にうつる。この庵は三部屋あって約10年間住む。

文政9年（1826）69歳の秋、和島村島崎の能登屋木村元右衛門の裏庭にある小舎に移り、手厚い庇護をうける。

天保2年（1831）1月6日、74歳で亡くなるまで良寛は詩歌を詠み、筆をとって清らかな人間性と芸術の真価を伝える。

親交のあった与板町徳昌寺の大機和が導師となり、木村家の菩提寺である島崎の隆泉寺墓地に埋葬する。高さ165cmほどの花崗岩の良寛墓を中心に、左に弟由之の墓、右に木村家累代墓がある。

宝暦8年（1758）生まれ。

天保2年（1831）1月6日没 75歳。

